



俺も産ませたいよ。

2月13日(木)の5時間目の授業が終わった時、Aさんが、スケッチブックで顔を囲い、静かに泣いていました。普段であれば元気がよく、笑顔が素敵なAさん。しかしこの時は、スケッチブックを手放さず、机の上には零れ落ちた涙で水たまりができていました。

この日の5時間目は、もなに出産をさせるかの話し合いをしていました。産ませたい人はAさんも含めて4人、産ませたくない人は32人でした。もなの命の線を繋いであげたい、もなにお母さんになる経験をさせてあげたいと願う4人と、適齢期ではないからリスクを負わせたくない、長生きしてほしい、もなの赤ちゃんに、もなと同じ経験をさせたくないという32人。私は、全員が納得した決断をしたという思いで、獣医の佐藤先生や、伊香保グリーン牧場の前田さんの言葉を子どもたち



に伝えたり、羊の出産を動画で見せたりしてきましたが、どんな材を子どもたちに見せても、その思いは変わらなくなっていました。それぞれの子どもたちが、自分の意見をしっかりと持ち、揺れ動くことがなくなっていたのです。その様子を見て、もなには出産をさせないことを決めました。決めたというより、わたしにはそうすることしかできませんでした。授業が終わると、Aさんは泣いていました。私は、Aさんのそばに行き、「産ませたかったんだよね。命の線を繋いであげたかったのかな」と問うと、こくりとうなずきました。何と声をかけていいかわかりませんでした。本当にこの決断でよかったのか、自分に問いながら、Aさんの背中をさすっていました。すると、「産ませたくない」と考えていたBさんが近寄ってきて、Aさんの背中に手をあてながら、「Aさん、大丈夫だよ。俺も産ませたいよ。でも、もなはまだ若いから…。死んじゃうのは嫌だから…。長生きしてほしいし。もなちゃんは次に行く学校とかで赤ちゃんを産ませてもらうよ。写真くっださいって言えば送ってくれるようにお願いしといてさ。まだお母さんになれないわけじゃないと思うよ」と語りました。するとAさんの涙は止まり始め、前を向いて帰りの準備を始めました。

Aさんは、赤ちゃんが見たいという自分の願いをもちつつも、「もなの命の線を切りたくない。もなちゃんに、お母さんになる経験をさせてあげたい」と、もなちゃんの幸せを考えてみんなに伝えていました。同じ考えの友だちがたった4人でも、堂々と自分の考えを伝え、時には、「そんなに俺に向かって(反論を)言われるとグサグサくる」と言っていたこともありました。それだけ本気で考えた、わたしなりのもなの幸せを叶えてあげられないと決まったこの時、Aさんは悔しくてたまらなかったに違いありません。本気でもなの幸せを考えたからこそ溢れ出た涙だと思うのです。普段のAさんは、自分の思い通りにならないことがあると、主張するかのように大声で自分の考えを伝えます。そんなAさんが、声をあげずにしくしくと泣いていました。この姿から、きっとAさんは、もなに子どもを産ませるべきではないことも分かっていたのではないかと感じます。答えが1つでない問いは、最終的には天秤にかけることでしか決めることはできません。Aさんの中には産ませない選択肢もあったけれど、産ませる選択肢の方がもなにとっての幸せを叶えてあげられると考えていた、それだけなのだと思います。そんなAさんにBさんから投げかけられた、「俺も産ませたいよ」「まだお母さんになれないわけじゃない」という言葉。Bさんの中にもAさんと同じ思いがあること、これから先にも



なの命の線をつなぐことができる可能性があることを知ったAさんは、少し天秤が傾いたのではないのでしょうか。お互いの思いを聴き合い、伝え合うからこそ、自分の中の天秤を見つめ直していくことができるのだらうと感じました。友との関わりがあるからこそ、わたしを知っていく学びが生まれるのだと気づかされました。

残された羊のことも考えると…。

もなに友だちを迎えることを案外すんなりと決め出した子どもたちとは裏腹に、わたしはもなの友だちを迎えることに踏み切れずにいました。今のまま迎えてはいけないような気がしていました。そんな漠然とした不安を、動物飼育の経験があるC先生に伝えました。すると、「私は学校での動物飼育はよかったのかと聞かれると、未だにうまく答えられない。学校現場に動物を連れてくるということは、悪く言えば人間の都合だから。命あるものを限られた期間だけ学校に連れてくることは本当にいいのか。私は迷う」と語ってくれました。この言葉を聞いた時、わたしの胸はざわつきました。「子どもたちは、迎える羊に対してどういう気持ちを持っているのだろうか…。もなを幸せにするための道具として見てはいないだろうか…。」羊を群れから離して連れてくるということが、羊にとってどれだけ辛く、ストレスがかかることなのか。そこを考えた上で羊を迎えたいと考えたわたしは、もなの生まれ故郷である伊香保グリーン牧場に行くことで、羊にとっての「群れ」の大切さを感じ、群れから引き離して迎える羊に対して心を寄せていくのではないかと考え、3月6日に子どもたちと伊香保グリーン牧場へ大冒険に出かけました。

牧場では、シープドッグショーを見ました。辺り一面に広がって草を食べている羊を、牧羊犬が1カ所に追い込んでいきます。牧羊犬に追われた羊は、1つの大きな群れとなって移動していました。続いて羊の群れを柵の中に入れ、その中から5頭の羊だけを取り出しました。すると取り出された羊は、大きな群れに帰ろうと柵の方に近寄っていきます。中には、柵を跳び越している羊もいました。しかし牧羊犬に追い立てられ、仕方なく5頭で群れをつくりながら、様々な障害物に挑戦していました。

その翌日、牧場見学の振り返りをしました。その時の語り合いは次のようなものでした。



Dさん：ショーで分けられた羊が群れに戻ろうとしていたのを見て、群れて羊にとって大事なんだと分かった。

Eさん：多分怖さを消してくれるものだね。

Fさん：人間もさ、一人ぼっちだと怖い時あるじゃん。みんながいれば怖くないんだよ。羊もきっと同じなんだと思う。

Gさん：もなちゃんは、あれだけ多くの群れの中から連れてこられたんだから、家族から誘拐されたみたいな感じ。

きっと寂しいと思う。

Hさん：できるだけ多めに迎えられたら、群れになれてよさそうだよね。

Aさん：でも、残された羊は群れが小さくなっちゃう。伊香保グリーン牧場に残された羊のことも考えると、迎えていいかどうかちょっとだけ迷っている。



「もなのためなら何でもやる」と言うAさん。友だちを迎えるかどうかの話し合いでは、目の前にいるもなの視点に立って、「もなのために迎えるのは当たり前」と言っていました。そんなAさんが、羊を迎えることに立ち止まっていました。それは、伊香保グリーン牧場で、群れをなすことで安心して暮らす羊を目の当たりにしたからでしょう。Aさんは連れて来ようとしている羊の群れの視点に立ち、人間の都合で羊を連れてくることに対して、「本当にいいのだろうか」と自らに問うていました。本物の羊の暮らしから、自分の立ち位置を変えながら自分の考えを見つめ直す姿に、わたしはAさんの育ちを感じずにはいられませんでした。恐らく群れから離れてやってきた羊は、私たちの

思い通りにはいかないことがたくさんあると思います。その姿を目の前にした時、Aさんをはじめ、子どもたちは、何を思いどう行動するのでしょうか。私もその空間を共にしながら、子どもたちと考え合いたいです。